

Title	石器は海峡を越えたか：本州最北端出土旧石器の系譜に関する一試論
Sub Title	Did stone tools cross the Tsugaru strait in paleolithic age? : a preliminary report on the genealogy of stone tools which were excavated from the northeastern edge of honshu island, Japan
Author	渡辺, 丈彦(Watanabe, Takehiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.84, No.1/2/3/4 (2015. 4) ,p.551(551)- 567(567)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第1分冊) 論文 民族学考古学 挿図
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150400-0551

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

石器は海峡を越えたか

——本州最北端出土旧石器の系譜に関する一試論——

渡 辺 丈 彦

一 はじめに

ブラキストン線 (Blakiston Line) とは、津軽海峡を東西に横切る動植物の分布境界域の一つである。津軽海峡の北海道側ではヒゲマ、エゾシカ、エゾシマリリスなどが棲息するのに対して、本州側ではツキノワグマ、ニホンシカ、ニホンザルなど棲息する等、その南北で特に哺乳類・鳥類相に大きな相違が大きく異なることで著名であるが、この線を境に、日本列島の旧石器時代人が残した様々な石器文化も大きく異なるとされる。

日本の旧石器文化は較正年代で約二・九万年前の始良カルデラの噴火、そしてその火山灰の降灰を境にして前半期と後半期にわけるのが一般的であり、前半期を特徴づける石器に台形石器や基部加工ナイフ形石器などがある

。これらは北海道を含む日本列島の広範に確認されており、それをもって北海道と本州以南の旧石器文化の近縁性があったことの証左とされるが、以後その近縁性は薄れ大陸と関連した要素が顕在化する（山原・寺崎二〇一〇）。実際、北海道の基部加工ナイフ形石器（オパールベツ型）にしても、出土例数は多いとは言えず、その分布域は渡島半島の一部に限られる。以後の本州以南においてナイフ形石器が地域色を持ちながらも盛行するのに対して、北海道では後続する時期にその系譜を確認することはできない。

このように、基本的に旧石器時代の日本列島においては津軽海峡の南北で異なる石器文化が展開したと考えられる。一方、前述の様に北海道と本州以南の地域間の近縁性を確認できる場合もある。その場合、津軽海峡を挟

石器は海峡を越えたか

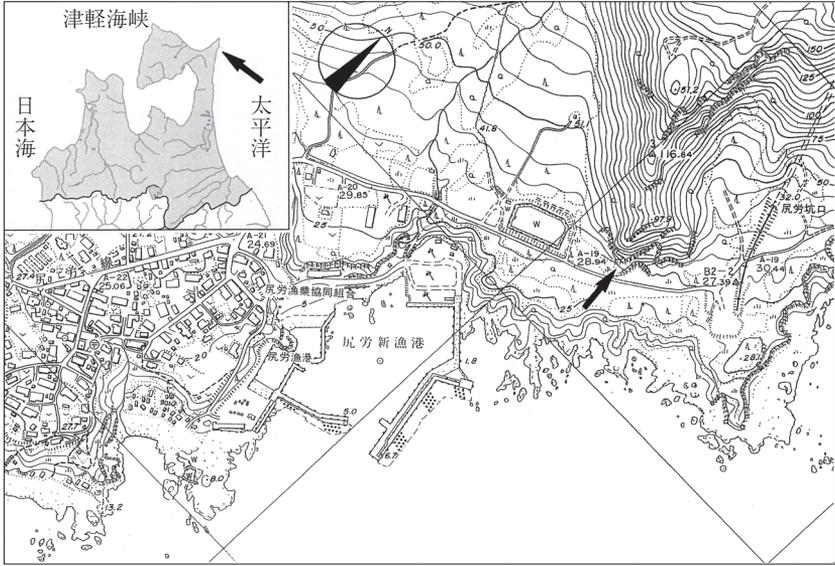
んだ南北の結節点となるのは、北海道渡島半島、青森県津軽半島・下北半島域であり、両地域における旧石器文化の様相の把握とその比較検討は不可欠な作業となる。

しかしながら、北海道渡島半島の旧石器時代遺跡の発掘調査例数の増加にともない、内容的にも良好な石器群の研究例も蓄積しているのに対して、津軽半島や下北半島では、分析に耐えうる石器群は青森県外ヶ浜町の大平山元遺跡群など極めて数が限られ、その比較検討が困難なものとなっていた。

その様な中、近年、下北半島最東北端の尻屋崎付近に所在する尻労安部洞窟からナイフ形石器や台形石器からなる五点の旧石器が、動物骨と共伴する形で発見された。津軽海峡を挟んで、渡島半島との直線距離はわずか五十キロメートルほどであり、当該資料群はその所属時期における海峡南北の石器文化の関係性を語る上で不可欠な資料群となる可能性も考えられる。そこで本論文においては、まず尻労安部洞窟出土石器群の技術形態学的な諸特徴をまとめ、次いで周辺地域の遺跡から出土した類似資料との比較検討を行い、最終的にその帰属年代や系譜について言及する。

二 尻労安部洞窟の概要

尻労安部洞窟は、青森県下北半島東北端、桑畑山東南麓の標高三十三メートル、現海岸線からは約一五〇メートルの位置にある石灰岩洞窟である(第1図)。洞窟前面に広がる河岸段丘は、下北丘陵の縁辺部に広く分布するステージ5e、すなわちおよそ十二・五万年前の下末吉海進期の海成段丘に対比され、洞窟の開口する崖は最終間水期の高海面期における海食崖であり、洞窟は当時形成された海食洞であると考えられる(松原二〇一五)。現在の洞窟は、石灰岩採掘の影響などにより間口三・三メートル、奥行二・五メートル、岩庇高二・〇メートルの岩陰状の形状をなし、南南西に開口するが、形成当時は幅・奥行き共により大型であったと推定される。発掘調査は、二〇〇一年から二〇一四年にかけて慶應義塾大学民族考古学研究室を中心とする尻労安部洞窟発掘調査団により実施され、地表下約三・五メートルの発掘最下底面までに合計十七層が確認された。そのうちII層は縄文時代中期後葉〜後期前葉代の、IV層は縄文時代早期の、XIII〜XIV層は旧石器時代の層準に比定されている。旧石器時代の層準となるXIII〜XIV層からは、人工遺物とし



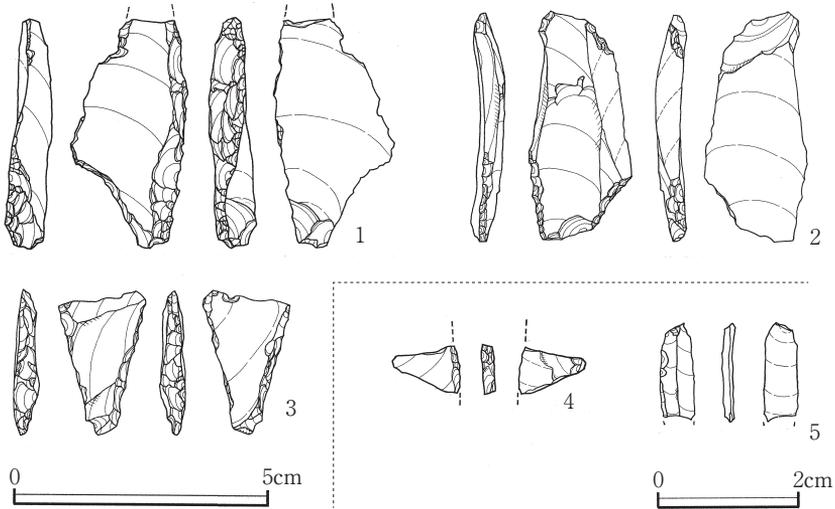
第1図 尻労安部洞窟の位置 (Scale = 1 : 10,000)

では旧石器五点が、自然遺物としてはノウサギ属を主体に、大型偶蹄類、ヒグマ、カモシカ、ムササビなどの動物骨約一〇〇点が出土した（尻労安部洞窟発掘調査団二〇一五）。

三 尻労安部洞窟出土旧石器の技術形態学的特徴

尻労安部洞窟Ⅲ～Ⅴ層から出土した五点の石器を第2図に示した。その器種組成は、ナイフ形石器二点、台形石器一点、二次剥離剥片一点、剥片一点であり、台形石器を除く他の四点はいずれも珪質頁岩を素材とする。以下、出土した五点の石器についてその形態や製作技術上の特徴などの概略を述べる。

ナイフ形石器〔第2図1・2〕 いずれも縦長剥片を素材とし、その背面に残される剥離面と、主要剥離面の剥離方向が一致することから、単設打面石核から剥離されたものと推定される。ブランディングは、1は正面右側縁全体および左側縁下部、2は正面左右両側縁基部付近及び右側縁上端付近に施され、その結果、前者は左側縁中央やや下部付近に大きな肩が、後者は右側縁中央やや下部付近にやや小さな肩が作出される。素材剥片の剥離



第2図 尻労安部洞窟出土石器

技術、サイズ、平面形状は共通しており、出土層位もⅣ層下部～Ⅴ層上面と同一である。また1の尖端部は欠損し、その破損面を起点にした剥離面（衝撃剥離）が数枚観察され、2についても正面右側縁上端付近の二次剥離が、器体上端が欠損した後に施された再加工の痕跡と評価できることから、双方ともに相当量の使用を経た資料と推定できる。

台形石器〔第2図3〕 縦長剥片あるいは石刃を素材剥片とする。主要剥離面および背面のすべての剥離面の剥離方向が一致していることから、素材剥片は単設打面石核から剥離されたと推定される。素材剥片に対する二次的加工は、まず素材剥片の打面側と先端部側を折断し、残された中間部の折断面に対して裏面から急角度のブラントイングを施すものである。その結果、器体の最終的な平面形態は、基部側が大きくすぼまる台形をなし、正面図上端にみられる素材剥片のもの左側縁が刃部となる。この刃部には、微細剥離痕数枚がみとめられ、左右両側縁には刃部付近から下方向に向かう縦方向の小剥離面も認められる。いずれも、本資料の使用にとまない生じたものと推定される。出土層位はⅢ層下部であり、ナイフ形石器より相対的に上位の位置から出土した。

二次剥離剥片〔第2図4〕 破損による欠損部位が多いことから、尻労安部洞窟の発掘調査報告書中では、二次剥離剥片として分類した。しかしながら同書中でも指摘している様に、残存部位にはブランチング状の連続した急角度の剥離が認められ、ナイフ形石器の一部である可能性が高い。出土層位はⅣ層である。

剥片〔第2図5〕 Ⅳ層上面から出土した資料で、左右両側縁及び中央にみられる稜線がほぼ平行であること、そして推定復原される長さが二センチメートル程度と小型であることから、細石刃である可能性も指摘できる。しかし、同様の形態は偶発的に生じる可能性もあり、さらにこの資料以外に細石刃と認定できる資料や、細石刃核等も出土しなかったことから、剥片に分類した資料である。

以上に述べた石器群については五点全体で一つの石器群とみなすか、あるいは二、三点ずつと合わせて少数の石器からなる複数の石器群の総体とみなすかによって、評価に一度の影響はある。しかしいずれにせよ、出土石器のほとんどが定形的石器であることに、本洞窟出土石器群の際立った特徴がある。本洞窟では、旧石器時代に属すると考えられるⅩⅤ層の掘削で生じた土壤全量

に対する水洗選別作業を実施したが、石器製作の過程で生じる微細剥片等は回収されなかった。これらのことから、本洞窟は素材剥片の生産及び二次加工などの石器製作活動はおこなわれず、相当量の使用を経た定形的石器を遺棄あるいは廃棄した場であり、ノウサギ属等を中心とする一定量の動物骨を伴うことも考慮して、短期間の狩猟用キャンプとみなされている（渡辺・田中・平澤二〇一五）。

これまで、国内では約一万か所にも及ぶ旧石器時代遺跡が確認されているが、その多くが河岸段丘上に残された石器製作跡としての開地遺跡であり、本洞窟出土石器群は当該時期の狩猟採集生活を考える上で貴重な事例といえる。次の章ではこの希少な石器群に時間的な位置づけを与え、さらにその系譜についても言及する。

四 尻労安部洞窟出土石器群の帰属年代について

(1) 帰属年代を考える上での問題点

前述の通り、ナイフ形石器二点はⅣ層下部Ⅴ層上面から、台形石器はⅢ層下部から出土した。この出土層位の垂直的な位置関係からとらえるならば、相対的に下位

の層から出土したナイフ形石器が古く、上位の層から出土した台形石器が新しいと位置付けられる。しかしながら、旧石器時代の開地遺跡において出土する石器資料は、その埋没過程の中で様々な自然の営力をうけ、当初の埋没位置から平面的・垂直的に移動することはよく知られている(御堂島・上本 一九八七・一九八八)。一方、洞窟のある岩体の崩壊によって生じたと推定される大小

様々な粒径の礫が多量に含まれる洞窟内の堆積は、開地遺跡に比べてもその安定度は更に低い。このことは、後期更新世と判断された本洞窟Ⅺ～ⅩⅦ層から出土した動物骨に対する放射性炭素年代測定の結果からも裏付けられる。

台形石器が出土したⅩⅧ層では、試料三点の測定値が、較正年代で約四、六〇〇～四、八〇〇年前、約三二、〇〇〇年前、約三八、〇〇〇～三九、〇〇〇年前と大きなバラツキをみせた。またナイフ形石器が出土したⅩⅧ層最下部～ⅩⅣ層上面では、単体で測定に耐えうる出土遺物がなかったため、ナイフ形石器の周辺から出土したウサギの歯十六点をまとめて一つの試料として分析したところ、ⅩⅧ層で得られた測定値とは逆転する約二〇、〇〇〇～二一、〇〇〇年前という年代値となった(金井・米田二〇一五)。いずれも洞窟内の堆積が不安定であることを物

語る例であり、石器出土層位の相対的上下関係、そして各層から出土した有機質遺物の放射性炭素年代測定の結果からのみ、ナイフ形石器と台形石器の所属時期の絶対年代値や前後関係を論じることが困難であることを示している。

よって次節では、石材選択、素材剥片剥離技術、平面形状、法量などの面で共通した石器を安定的に出土する遺跡を周辺地域にもとめ、その帰属年代を参考に、尻労安部洞窟出土資料の帰属年代等の推定をおこなう。

(2) 尻労安部洞窟出土石器群類似資料との比較検討
ナイフ形石器 尻労安部洞窟出土資料は二点のみであるが、それらの石材選択、素材剥片剥離技術、平面形状などの特徴をまとめると以下の様になる。

- ①珪質頁岩製の単設打面石核から剥離された縦長剥片又は石刃を素材とする。
- ②二側縁加工ナイフ形石器であり、器体下部の一侧縁にブラントイングが施され肩が作出される。
- ③先端部分が欠損する、あるいは欠損後の再加工が認められるが、最大長は五センチメートル前後であったと推定される。

④先端が欠損しているため参考値となるが、幅に対する長さの値（以下、長幅比）は二・三前後となる。

尻労安部洞窟を中心とした場合の周辺地域、具体的には北海道から東北地方（一部、新潟県域を含む）にかけての地域において、尻労安部窟出土ナイフ形石器と共通した二次加工部位及び平面形状をもつナイフ形石器は、田向冷水遺跡（青森県八戸市）、上ミ野A遺跡第一・二次調査（山形県新庄市）、樽口遺跡A・KSE文化層（新潟県朝日村）からある程度まとまった数が出土している。その一方、北海道においてはその類例資料は認められない。

このうち田向冷水遺跡出土からはナイフ形石器十三点が出土している。すべて石刃あるいは縦長剥片を素材とした二側縁加工のものであり、尻労安部洞窟出土資料と同様の肩の張り出す平面形状の資料は十一点ある（第3図上段）。大きさは長さ四〜五センチメートル、幅一・五センチメートル、長幅比は二・五〜三・八に集中する（第5図）。肩を作り出す位置、すなわち最大幅を測る位置は、器体中央又は中央よりやや尖端の資料が多い（八戸市教育委員会二〇〇八）。

石器は海峡を越えたか

上ミ野A遺跡第一・二次調査では合計二六点のナイフ形石器が出土し、二次加工の位置と方法、平面形態からI〜VIの六群に分類されている。このうち二側縁加工で且つ肩を作り出す形態の資料はI群に分類され、さらに長さが四〜五センチメートルの資料をIa群（六点出土）、六〜九センチメートルの資料をIb群（四点出土）としている（東北大学大学院文学研究科考古学研究室二〇〇四）。Ia群の幅は一・九〜二・四センチメートル、長幅比は二〜二・五程度に集中し、肩の作出位置は器体中央やや基部よりの資料が多いが、長幅比が一・六と小さく、肩の作出位置が尖端に寄る資料も見られる。Ib群の幅は二・六〜三・五センチメートル、長幅比は一・九〜三・九と比較的バラつきが大きい。Ia群同様に、肩の作出位置はいずれも器体中央又はやや基部よりになる（第3図下段、第5図）。

樽口遺跡A・KSE文化層からは合計五六点のナイフ形石器が出土し、二次加工の位置や平面形態からI〜VIIの七類に分類されている。このうち二側縁加工で且つ肩を作り出す形態の資料はII類に分類され、三点が出土した（朝日村教育委員会一九九六）。出土した三点の長さ・幅・長幅比は、第4図1が、六・四センチメートル、

五五七（五五七）

二・五センチメートル、二・六、第4図2が五・〇センチメートル、二・一センチメートル、二・四、第4図3が三・八センチメートル、二・五センチメートル、一・五となる(第5図)。肩を作出する位置は、前二者が器体中央より基部側に、後者は大きく先端側に寄る。

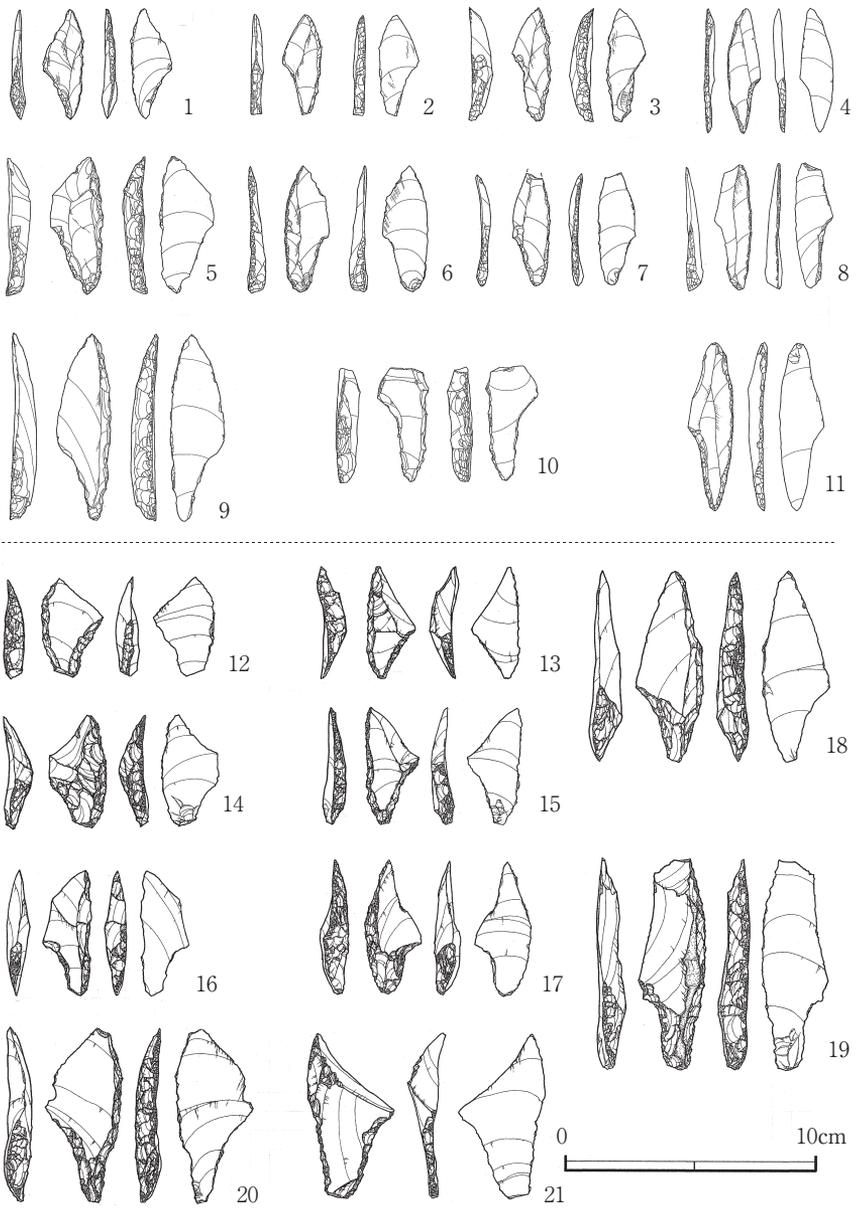
次に、長さ・幅・長幅比・肩作出位置の観点から、尻労安部洞窟、田向冷水遺跡、上ミ野A遺跡、樽口遺跡A・KSE文化層出土のナイフ形石器の比較を行った。その結果、上ミ野A遺跡Ia群や樽口遺跡A・KSE文化層Ⅱ類の一部(第4図1・2)のナイフ形石器の持つ、長さ四く五センチメートル、幅一・九く二・四センチメートル、長幅比二・〇く二・五程度、肩の作出位置は器体中央又はやや基部よりという特徴が、尻労安部出土のナイフ形石器のものに良く近似しており、これらの遺跡出土資料に比較的近い時間的位置づけを与えることができる。

次に、尻労安部洞窟出土資料と近い時間的な位置付け与えた上ミ野A遺跡・樽口遺跡A・KSE文化層の年代観をみてみよう。上ミ野A遺跡では出土石器群の垂直分布の中心や礫群が3a層上位で確認されており、生活面もその位置に推定されている。その下部の3b層中位におい

て始良Tn火山灰(較正年代二・九万年前前後)、そして上部からは十和田八戸テフラ(一・五万年前)の可能性があるテフラの降下層準が確認されている(早田・北村・新井二〇〇四)。また、樽口遺跡A・KSE文化層はV層中で確認されたものであり、同層最下部からも始良Tn火山灰が検出されている(早田一九九六)。このことから、上ミ野A遺跡Ia群資料・樽口遺跡A・KSE文化層Ⅱ類資料、そしてそれに近似する尻労安部洞窟出土資料については、大枠では始良Tn火山灰降灰後という時間的位置づけを与えることができよう。

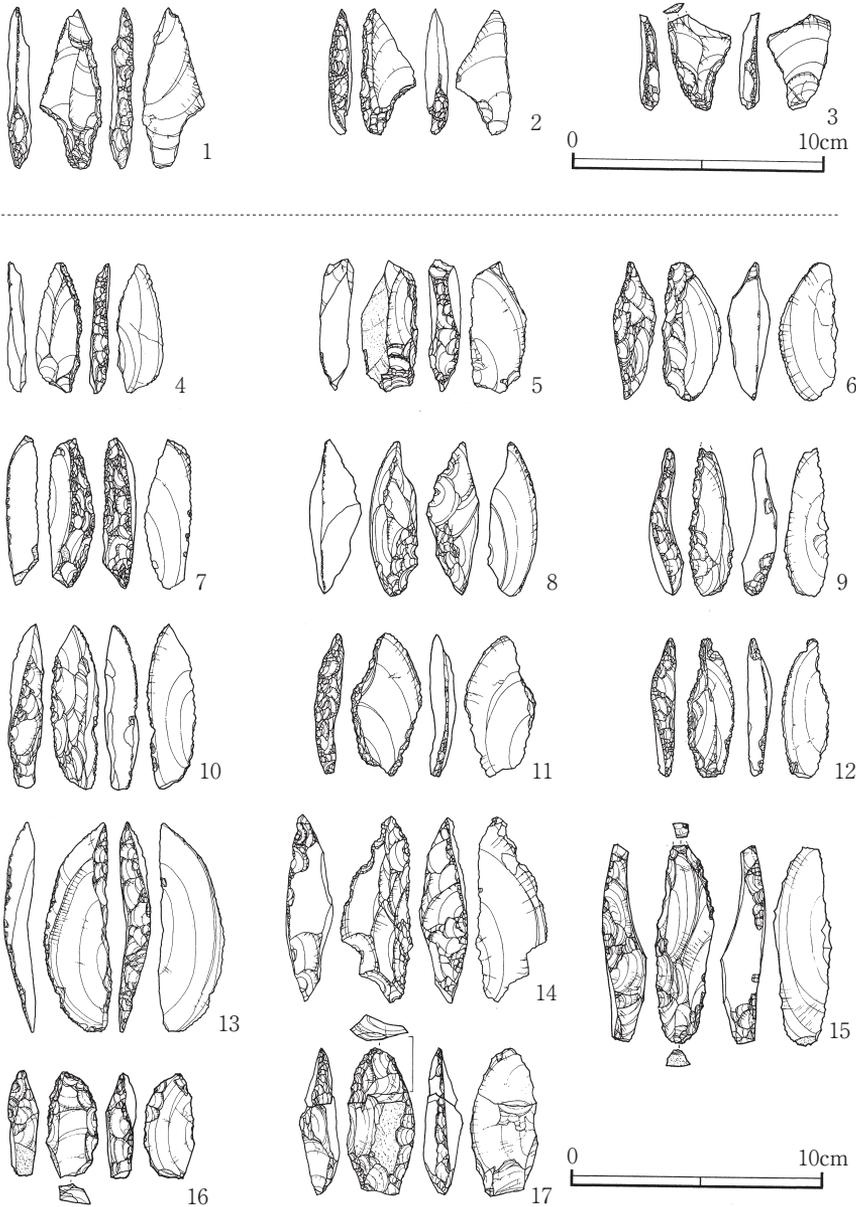
更に、樽口遺跡A・KSE文化層でⅡ類に共伴した他の石器群をみると、更にその年代幅を縮めることも可能である。同遺跡跡A・KSE文化層出土資料の中で注目すべき資料として横長剥片を素材とするナイフ形石器や角錐状石器がある(第4図1く17)。羽石(二〇〇四)が指摘する様に、二側縁加工のナイフ形石器にこれらの器種が共伴する例は、南関東地方から中部地方でも多く確認されている。これらの器種は編年研究の確立した南関東地方の武蔵野台地ではV層からIV層下部に位置付けられるものであることから(織笠一九八七・一九八八)、上ミ野A遺跡Ia群資料・樽口遺跡A・KSE文化層Ⅱ類

石器は海峡を越えたか



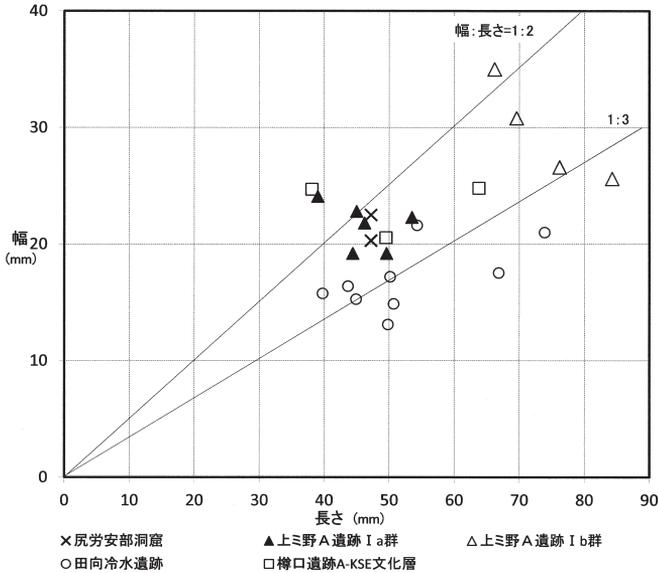
五五九
(五五九)

第3図 田向冷水遺跡（上段）・上ミ野A遺跡出土石器（下段）



第4図 樽口遺跡A-KSE文化属出土石器(上段:二側縁加工ナイフ形石器、下段:その他)

石器は海峡を越えたか



第5図 ナイフ形石器の長幅比

資料、尻労安部洞窟出土資料についても同様の編年的位置づけを与えて良いと考える。工藤(二〇一〇・二〇一〇)によれば、遺跡出土資料の測定例が少ないなど評価が難しい側面があるものの、武蔵野台地V〜IV層下部の

第1表 尻労安部洞窟出土ナイフ形石器と類似資料の法量

遺跡名	所在地	図番号	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
尻労安部洞窟	青森県東通村	第2図-1	珧質頁岩	(46)	23	7	6.4	
		第2図-2	珧質頁岩	45	20	5	6.0	
田向井冷水遺跡	青森県八戸市	第3図-1	珧質頁岩	44	16	6	2.7	
		第3図-2	珧質頁岩	40	16	4	2.9	
		第3図-3	珧質頁岩	45	15	10	4.4	
		第3図-4	珧質頁岩	50	13	4	2.3	
		第3図-5	珧質頁岩	54	22	9	9.1	
		第3図-6	珧質頁岩	50	17	7	4.3	
		第3図-7	珧質頁岩	(44)	15	6	2.5	
		第3図-8	珧質頁岩	(50)	14	7	3.0	
		第3図-9	珧質頁岩	74	21	10	11.7	
		第3図-10	珧質頁岩	(45)	20	10	7.1	
		第3図-11	珧質頁岩	67	18	8	6.4	
上ミ野A遺跡	山形県新庄市	第3図-12	珧質頁岩	39	24	8	6.1	Ia群
		第3図-13	珧質頁岩	44	19	8	5.6	Ia群
		第3図-14	珧質頁岩	45	23	9	7.6	Ia群
		第3図-15	珧質頁岩	46	22	7	5.7	Ia群
		第3図-16	珧質頁岩	50	19	9	6.2	Ia群
		第3図-17	珧質頁岩	54	22	10	7.8	Ia群
		第3図-18	珧質頁岩	70	31	10	15.9	Ib群
		第3図-19	珧質頁岩	66	35	9	12.0	Ib群
		第3図-20	珧質頁岩	76	27	13	17.4	Ib群
		第3図-21	珧質頁岩	84	26	10	20.9	Ib群
樽口遺跡 A-KSE文化層	新潟県村上市	第4図-1	珧質頁岩	64	25	9	10.3	II類
		第4図-2	珧質頁岩	50	21	9	7.0	II類
		第4図-3	珧質頁岩	38	25	8	5.3	II類

() 内の数値は残存値

五六一 (五六一)

較正年代は約二・八～二・五万年前後となる。

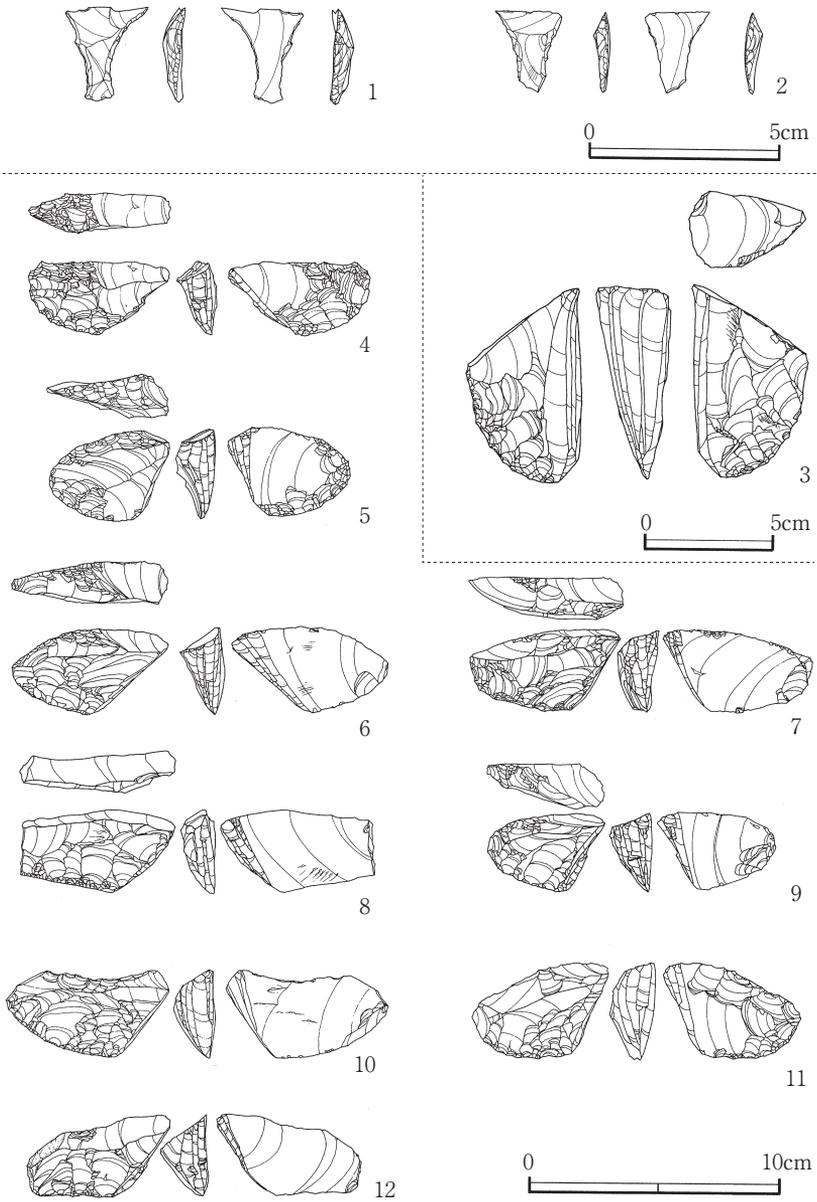
台形石器 尻労安部洞窟出土の台形石器は一点のみであり、その使用石材、素材剥片剥離技術、二次加工の位置、平面形状などの諸特徴については、第三章にまとめた通りである。

一般的に台形石器については、始良Tn火山灰降灰以前の時期に位置づけられ、東北地方でも風無台II遺跡や松木台I遺跡など秋田県域を中心とした遺跡から当該時期のまとまった資料群が出土しており(秋田県教育委員会一九八五)、その平面形状や二次加工の部位については、尻労安部洞窟出土資料と近似する資料もある。しかしながら、二次加工頻度の低い資料や接合資料の観察から推定される二次加工前の素材剥片の形状は、長さに対する幅の割合の大きい寸詰りのものであり、縦長剥片あるいは石刃を素材とした可能性が高い尻労安部洞窟のものは異なる。その一方、台形石器は九州や北海道においては始良Tn火山灰降灰以後にも残り、本遺跡とは津軽海峡を挟んで対岸に位置する北海道上磯郡知内町の湯の里4遺跡からも、黒曜石製、頁岩製の資料がそれぞれ一点出土している(北海道埋蔵文化財センター一九八五)。両資料ともに、素材となる縦長剥片あるいは石刃の打面

側・末端側をそれぞれ切断し、その切断面から急角度の二次的調整を加えて全体形状を台形に整えるという特徴をもち、本遺跡出土資料の技術形態学的諸特徴と一致する(第6図1・2)。

この湯の里4遺跡では、北海道の細石刃文化の中で最古層とされる蘭越型(第6図3)と、それに後続する峠下型2類の細石刃核が出土し(第6図4～12)、出土した台形石器がそのいずれに共伴するかがその帰属年代を判断する際の材料となる。仮に、蘭越型細石核に共伴するとした場合、その帰属年代は、蘭越型が出土した北海道千歳市の柏台1遺跡の炉跡出土炭化物の放射性炭素年代測定から得られた二・五万～二・三万年前(較正年代)に近い時期となる。一方、報告書中では、遺物の平面分布を根拠に台形石器は峠下型2類に共伴したと記載され、そう考えた場合は、二・五万～二・三万年前より遅れる時期ということになる。むしろこれをもって尻労安部洞窟出土台形石器の帰属年代を確定することはできない。しかし東北地方北部から北海道において、尻労安部洞穴と近似した技術形態学的特徴をもつ台形石器の出土例は湯の里4遺跡のみであり、同資料に帰属年代を考える上で、現在のところ最も概然性の高い手掛かりと考

石器は海峡を越えたか



五六三 (五六三)

第6図 湯の里4遺跡出土石器 (上段：台形石器、下段：細石刃核)

える。

小 結 以上、尻労安部洞窟出土石器についての技術形態学的特徴をまとめ、更に同様の特徴をもつ他遺跡出土資料の帰属年代を参考にして、その帰属年代を推定した。

その結果、Ⅲ層下部出土の台形石器については、較正年代で二・五万～二・三万年前あるいはそれをやや下った時期、Ⅳ層下部～Ⅴ層上面出土のナイフ形石器については較正年代で二・五万～二・八万年前にその帰属年代をおいた。現在のところ、ナイフ形石器と台形石器の出土層位は異なり、技術形態学的特徴などから導き出した帰属年代についてもわずかながらズレが生じている。次章では、この点を考慮に入れ、さらに尻労安部洞窟の地理学的位置を加味しながら、ナイフ形石器と台形石器の系譜やその関係性を含め、尻労安部洞窟Ⅲ～Ⅴ層出土石器群総体としての評価をおこなう。

五 石器は海峡を越えたか

尻労安部洞窟出土旧石器は、Ⅲ層下部～Ⅳ層下部・Ⅴ層上面というある程度の幅を持った垂直的な位置関係の中で出土している。第四章(1)で述べた通り、洞窟の堆積が開地遺跡に比べて不安定である点を考慮すると、Ⅲ層

下部出土の台形石器とⅣ層下部～Ⅴ層上面出土のナイフ形石器が相伴したか否かについての判断は慎重にならざるを得ない。そこで本章では、相伴すると仮定した場合と、相伴しないと仮定した場合とに分けて、尻労安部洞窟出土旧石器の評価をおこなう。

まず始めに両者が相伴したと仮定した場合、尻労安部洞窟出土石器群には、本州島北部に類例を求められる資料(有肩の二側縁加工ナイフ形石器)と、北海道渡島半島に類例を求められる資料(台形石器)の二つが認められることになる。前章でも述べた通り、現在、筆者が推定した前者の帰属年代は二・五万～二・八万年前、後者は二・五万～二・三万年前あるいはそれをやや下った時期であり、その両者は完全には一致しない。しかしながらその差は大きくないと考え、尻労安部洞窟が本州島最東北端の青森県下北半島に位置し、北海道渡島半島の最南東端から津軽海峡を隔ててわずか五十キロメートルという位置関係も考慮すれば、本州のナイフ形石器文化と北海道の最古相に位置付けられる細石刃文化(蘭越型又は峠下型2類)の双方の要素をもつ石器群が存在した可能性も考えることができる。

一方、両者が相伴しないと仮定した場合は、旧石器時

代における尻労安部洞窟の利用が二度あったこととなる。一度目は本州島北部に類例を求められる資料（有肩の二側縁加工ナイフ形石器）が残された二・五万～二・八万年前であり、二度目が北海道渡島半島に類例を求められる資料（台形石器）が残された二・五万～二・三万年前あるいはそれをやや下った時期ということになり、相互に影響を及ぼすことのなかった個別の石器群あるいは石器として評価することとなる。

以上、本州北部と北海道渡島半島にそれぞれ類例を求められる資料を、共伴する場合と、しない場合とで、それぞれ異なる評価を行った。しかしいずれにせよ重要なものは、本州北部に類例を求められる有肩の二側縁加工ナイフ形石器が津軽海峡を越えていない、すなわち現在まで北海道でその出土例が確認されていないのに対して、北海道渡島半島に類例を求めた台形石器が津軽海峡を越え本州側の遺跡で確認されたことであろう。ナイフ形石器から推定される帰属年代と台形石器から推定される帰属年代のいずれを採用するにせよ、その時期は、最終氷期最盛期（LGM）と大枠では一致する。その時期、最大水深四五〇メートルの津軽海峡は完全に陸化しないものその幅は大きく縮小し、氷橋をとおして移動力の大

きい大型哺乳類の一部は津軽海峡を越え、本州に分布域を広げたとされる（河村一九八五・二〇一四）。尻労安部洞窟出土石器群の在り方は、氷橋を通した津軽海峡のヒトの往来を示唆するものであり、特に北海道から本州への具体的なヒトあるいはモノの動きを示す良好な材料になる可能性がある。

六 おわりに

本稿は、まず青森県下北郡東通村尻労安部洞窟出土の旧石器時代の異なる層準から出土したナイフ形石器と台形石器の技術形態学的な諸特徴をまとめ、次いで周辺地域の遺跡から出土した類似資料との比較検討を行い、最終的にその帰属年代や系譜について考察を行ったものである。

その結果、尻労安部洞窟出土のナイフ形石器と技術形態学的に類似した資料を出土する遺跡が、東北地方・北越地方・南関東地方にあり、その帰属年代が二・八～二・五万年前（較正年代）になること、そして台形石器の類似資料が津軽海峡を隔てた北海道の渡島半島南部で出土しており、その帰属年代が二・五～二・三万年前（較正年代）あるいはそれを下る時期になることを示し

た。その両者が同一の石器群を構成するものであるのか、または異なる石器群が時期を違えて出土しているのかについては、洞窟特有の堆積の不安定さゆえにその判断を留保したが、いずれの場合においても本洞窟出土石器群の示す内容は、最終氷期最盛期における津軽海峡を挟んだ本州と北海道のヒトあるいはモノの移動を示す結果である可能性がある」と評価した。

引用文献

- 秋田県教育委員会 一九八五『秋田県文化財調査報告書 七 曲台遺跡群発掘調査報告書―七曲臨空港工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
- 朝日村教育委員会 一九九六『朝日村文化財報告書第一集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ 樽口遺跡』
- 織笠 昭 一九八七『国府型ナイフ形石器の形態と技術―『古代文化』三九・一〇・一二古代学協会』
- 織笠 昭 一九八八『角錐状石器の形態と技術』『東海史学』二二 東海大学史学会
- 金井綾子・米田 穰 二〇一五『有機質遺物の放射性炭素年代』『青森県下北郡東通村 尻労安部洞窟Ⅰ二〇〇一―二〇一二年度発掘調査』尻労安部洞窟発掘調査団
- 河村善也 一九八五『最終氷期以降の日本の哺乳動物相の変遷』『月刊地球』七 海洋出版
- 河村善也 二〇一四『日本とその周辺の東アジアにおける第四紀哺乳動物相の研究―これまでの研究を振り返って―』『第四紀研究』五三 第四紀学会
- 工藤雄一郎 二〇一〇『旧石器時代における年代・古環境論』『講座日本の考古学Ⅰ 旧石器時代(上)』青木書店
- 工藤雄一郎 二〇一二『最終氷期の環境史と考古編年との時間的対応関係』『旧石器・縄文時代の環境文化史』新泉社
- 尻労安部洞窟発掘調査団 二〇一五『青森県下北郡東通村 尻労安部洞窟Ⅰ 二〇〇一―二〇一二年度発掘調査』
- 早田 勉 一九九六『樽口遺跡上段のテフラ分析』『朝日村文化財報告書第一集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ 樽口遺跡』朝日村教育委員会
- 早田 勉・北村 繁・新井房夫 二〇〇四『上ミ野A遺跡のテフラ分析』『最上川中流域の後期旧石器文化の研究―上ミ野A遺跡 第一・二次調査報告書』東北大学大学院文学研究科考古学研究室
- 東北大学大学院文学研究科考古学研究室 二〇〇四『最上川中流域の後期旧石器文化の研究―上ミ野A遺跡 第一・二次調査報告書』
- 八戸市教育委員会 二〇〇八『八戸市埋蔵文化財調査報告書第一一八集 田向冷水遺跡Ⅲ―田向土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書三―』
- 羽石智治 二〇〇四『石刃石器群との比較による上ミ野A遺跡の性格付け』『最上川中流域の後期旧石器文化の研究―上ミ野A遺跡 第一・二次調査報告書』東北大学大学院文学研究科考古学研究室

北海道埋蔵文化財センター 一九八五「北海道埋蔵文化財センター調査報告書第一八集 湯の里遺跡群―津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書―」

北海道埋蔵文化財センター 一九九九「北海道埋蔵文化財センター調査報告書第二三八集 千歳市柏台一遺跡―一般国道三三七号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―」

松原彰子 二〇一五「洞窟の形成と時期―洞窟周辺の自然地理学的考察―」『青森県下北郡東通村 尻労安部洞窟Ⅰ 二〇〇一～二〇一二年度発掘調査』尻労安部洞窟発掘調査団

御堂島正・上本進二 一九八七「遺物の水平・垂直移動―周水河作用の影響に関する実験的研究について―」『神奈川考古』二三 神奈川県考古学会

御堂島正・上本進二 一九八八「遺物の地表面移動―雨・風・霜柱・植物の影響について―」『旧石器考古学』三七 旧石器文化談話会

山原敏朗・寺崎康司 二〇一〇「旧石器文化の編年と地域性 北海道」『講座日本の考古学Ⅰ 旧石器時代（上）』青木書店

渡辺丈彦・田中亮・平澤悠 二〇一五「出土遺物の研究 旧石器時代 石器」『青森県下北郡東通村 尻労安部洞窟Ⅰ 二〇〇一～二〇一二年度発掘調査』尻労安部洞窟発掘調査団

石器は海峡を越えたか

挿図出典

第1図・第5図は渡辺丈彦作成。第2図は尻労安部洞窟発掘調査団（二〇一五）、第3図は八戸市教育委員会（二〇〇八）、東北大学大学院文学研究科（二〇〇四）、第4図は朝日村教育委員会（一九九六）、第6図は北海道埋蔵文化財センター（一九八五）掲載の石器実測図を基に作成。

【付記】

本論文は、尻労安部洞窟の発掘調査報告書（尻労安部洞窟発掘調査団 二〇一五）に執筆した「第五章 出土遺物の研究 第一節 旧石器時代 第一項 石器」の記載を基本にまとめたものである。また、執筆に際しては奈良貴史・佐藤孝雄・澤田純明・田中亮・澤浦亮平・平澤悠（敬称略）から様々なご指導・ご教授を得た。伏して御礼申し上げる次第である。